

生活科における国際理解教育の可能性

—地域に関する学習に焦点を当てて—

磯田 三津子 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：国際理解教育、生活科、地域

1. はじめに

世界の国々の相互依存関係は日々深化している。食を例に挙げてみても、わたしたちの生活は、多くの食材を外国に依存する状況にある。また、石油などのエネルギーも海外からの輸入に頼っており、他の国との関係なしに日々の暮らしは成り立たない。このように今日、各国の相互依存関係は深まり、世界は一つのグローバルな全体となりつつある（浅沼、2000年、p.14）。グローバル化の進展は、国境を超えた人の移動からも明らかである。人の移動は日本も例外ではない。近年、日本には多くの外国にルーツのある人々が暮らすようになった。法務省の調査によると、平成26年末の在留外国人数は、212万1,831人であり、前年末と比べ5万5,386人も増加している¹⁾。こうした日本国内における外国人の増加に従って、子どもたちは日本の中で外国にルーツのある人々と共に暮らしていく必要性にも迫られている。

国際理解教育は、1946年11月、国連の専門機関として創設されたユネスコ（国際連合教育科学文化機関UNESCO: United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization）によって進められてきた²⁾。多田は、世界で生じる様々な問題の解決に向けて、世界の国々、諸民族間の「相互理解が不可欠であり、『相互理解』は国際理解の基本ともいえる」と述べている（多田、2000年、p.38）。このように異なる国や民族間の相互理解は、国際理解教育の究極的な目的として位置づけられてきた。

国際理解教育は、教育における重要な課題のひとつである。平成8年の中央教育審議会において、「国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきものである」と提言された³⁾。このことは、子どもたちに国際理解のための知識や技能を育成することの大切さが指摘されたという点において注目すべきである。さらに、そこでは、国際理解教育の効果的な実践に向けて、知識・理解に限定した学習だけではなく、体験的な学習や課題学習などを行うことが強調された⁴⁾。このように、国際理解教育の必要性に伴って各教科、道徳、特活など教育課程全体の中で、体験的な活動を伴って国際理解教育に取り組まれることが期待されているのである。

以上を踏まえると、生活科は、国際理解教育を実践するのに適した教科であると考えられることができる。その理由は、生活科が「直接体験を重視した学習活動を行うこと、身の回りの地域や自分の生活に関する学習活動を行う」という点にある⁵⁾。生活科で国際理解教育を実践するために注目すべきであるのは、「小学校学習指導要領解説 生活編」において、学年の目標の中に「地域のよさに気づき、愛着をもつことができるようにする」というように、地域に関する学習の重要性が示されていることである⁶⁾。嶋野によると、生活科は、地域との触れ合いによる学習を進めることを基本にしており、ふるさとを愛し、大切にすることは、国際理解の基盤にもなる（嶋野、1994年、

p.15)。このように生活科の中で地域に着目することは、国際理解教育の出発点として注目すべきである。

そこで、本論では、地域と関連づけた生活科の学習において国際理解教育をどのように行うことができるのかを明らかにすることを目的とする。そのために、本論は、以下の手続きにしたがって論を進める。第一は、先行研究を検討し、これまでどのように生活科の中で国際理解教育に関する学習が論じられてきたのかを考察することである。第二は、地域を対象とした国際理解教育の学習内容と学習方法を明らかにすることである。第三は、生活科の単元における国際理解教育の実践のあり方を探るために地域と関連付けた実践事例を検討することである。

2. 生活科と国際理解教育—先行研究の検討

本章では、生活科における国際理解教育の実践について論じられてきた先行研究を考察する。

生活科における国際理解教育に関する先行研究には、森茂と鈴木（1993年）、田淵（2000年）の研究がある。まず、森茂と鈴木は、生活科と小学校社会科における国際理解教育カリキュラムを開発のための内容構成の枠組みと教材化の視点を明らかにした。森茂と鈴木は、生活科における国際理解教育について次のように述べている（森茂、鈴木、1993年、p.42）。

低学年において、子どもたちの社会認識は、身近なものから出発する。しかし、内容としては、家族や学校など身近なものを取り上げながらも、それを外国と比べてみたり、自分たちの世界と世界の結びつきを考えることは、子どもの興味を喚起するうえで重要である。

以上の通り、森茂と鈴木によると、生活科における国際理解教育は、社会認識の出発点である学校や家族といった子どもたちの身近なものを取り上げることが適している。このように生活科では、子どもたちの身の回りのものに焦点を当て、外国のものと「比較する」ことや、「結びつきを知る」ことで国際理解教育を進めることができる。そのことによって、子どもたちは、外国の存在について知り、外国の人々や文化についての気づきを深める。

以上にに基づき、森茂と鈴木は、生活科における国際理解教育の目標として、「世界の存在に気づき、世界に対する興味や関心を育てる」、「世界にはいろいろな人々が住んでおり、自分もその中の一人であるということに気づかせる」の二つを設定した（森茂、鈴木、1993年、p.46）。この二つの目標を具体化した学習活動は、「世界のあそび・衣食住」、「世界の学校・世界の家族」、「世界の動物・植物」といったテーマの中で実践される（森茂、鈴木、1993年、p.48）。これらのテーマに基づいた学習活動は、体験的な活動を中心としていることから低学年の子どもにとって意味がある。例えば、外国のゲームであそんだり、様々な国の民族衣装を見たり着たりすることは、低学年の子どもが関心をもって参加できる活動である。

一方で、田淵は、あそびに着目し、あそびを通して外国の人々と交流する実践を行った。田淵によると、偏見や固定観念の少なさといった観点から考えても、低学年で国際理解教育を開始することには意味がある（田淵、2000年、p.22）。同時に、体験を重視した生活科は、国際理解教育を実践するのに適した教科である。そこで、田淵は、身近な外国の人々とあそびを教え合い、交流を深めるという活動を通して、子どもたちが外国の文化に親しめる実践を行った。田淵の実

践は、森茂と鈴木が主張していたように、世界のあそびを体験する学習である。そして、田淵の実践の特徴は、あそびを通して、ALTを中心とした外国の人々と交流することを通して、外国についての気づきを深めていることである（田淵、2000年、p.23-27）。

森茂と鈴木、田淵の先行研究から明らかになったことは、次の3点である。第一は、生活科において、あそび、衣食住、学校、家族、動物・植物が生活科における国際理解教育の学習材となることである。第二は、それらの学習材を外国と「比較する」ことや、外国との「結びつきを知る」という方法で学習することである。第三は、あそびを通して、外国の人々と交流するということである。以上の3点は、生活科において国際理解教育を実践する際の重要な視点である。先行研究から理解できることは、生活科における国際理解教育は、以上の3点を中心に、実践が展開されているということである。

一方で、以上の先行研究は、本論で対象とする地域と国際理解教育を関連づけて論じたものではない。森茂と鈴木が指摘した通り、生活科では、あそび、衣食住、学校、家族、動物・植物といった学習材を中心に国際理解教育を展開することができる。それに加え、これらの学習材を子どもたちが暮らす地域と関連づけ、外国と「比較する」ことや、「結びつきを知る」ことは、国際理解をさらに深める可能性がある。

多田は、地域に根ざした国際理解教育の学習の有用性を次の4点にまとめている。第一は、世界と自分たちの生活の密接なつながりへの自覚を高めることである。第二は、子どもたちが実感を持ち、意欲的に学習に取り組むことである。第三は、多様な資料や素材が容易に見つけられることである。第四は、地域との信頼・協力関係が深まることである（多田、2000年、pp.139-140）。以上の4点から理解できることは、地域を子どもたちが現実的な課題として捉えて学習に取り組むことができるのと同時に、子どもたちの身近なところから世界との関わりについて知ることができるということである。そして、教師にとって地域は多様な学習材を収集しやすい。以上に加えて、地域の人々との関わりから多くを学ぶことができる点も見逃してはならない。地域は、低学年の子どもが実際に様々なことを体験できる場でもある。そういった側面から考えても、低学年の子どもを対象とした国際理解教育において、地域を対象とすることは適切であると考えられることができる。

3. 地域を対象とした国際理解教育の学習内容

本章では、生活科で国際理解教育を実践する際に、地域に関するどのような学習内容を単元の中に設定することができるのかについて考察する。

国際理解教育は、第二次世界大戦後、ユネスコが中心となって進めてきた。ユネスコの国際理解教育の目的は、1982年にユネスコ国内委員会が明らかにした『国際理解教育の手引き』の中に記されている。それは、①平和な人間の育成、②人権意識の涵養、③自国認識と国民的自覚の涵養、④他国・他民族・他文化の理解の増進、⑤国際的相互依存関係と世界の重要課題の認識に基づく世界連帯意識の育成の五つである（日本ユネスコ国内委員会、1982年、p.13）。その中でも、生活科における国際理解教育において、注目すべきであるのは、③自国認識と国民的自覚の涵養と、④他国・他民族・他文化の理解の増進である。しかし、ここで注意しなければならないのは、日本と外国をわけて論じていることである。佐藤は、国際理解教育の課題について以下のように述べている（佐藤、2001年、p.35）。

国際理解教育の学習内容は、まず第一に文化的多元主義を軸に構成する必要がある。これまでは異（国）文化理解、自（国）文化理解というように二元論的に文化を構成するのが一般的であった。この二元論から脱して、多元的、かつ可変的に文化を捉えていく必要がある。

このように、佐藤は、文化を国や地域、民族固有のものとして捉えることの問題点を指摘する。もちろん、地域には固有の文化や伝統は存在する。しかし、そういった地域固有の文化や伝統も、担い手の世代交代や、他の文化の影響によってさまざまに変化をしている。佐藤は、世界の文化の多様性だけではなく、国内の文化が多様化している状況を踏まえ、国際理解教育の学習内容が文化多元主義を軸に構成されることの必要性を論じたのである。このことは、グローバル化による人やモノ、情報の移動による地域の文化の多様性や、異文化との接触によって起こる文化変容を教育内容として位置づけていくことの必要性であると理解することができる。

したがって、ユネスコ国内委員会が明らかにした国際理解教育の目的の③自国認識と国民的自覚の涵養の考え方の中に、外国や他の民族の人々の存在や影響があることを前提に学習内容を構成していかなければならない。なかでも、子どもたちは、自国をどのように認識するのかということが課題となってくる。小学校低学年の子どもにとって日本を認識する最初の段階が地域である。そこでは、地域独特の伝統や文化を学ぶのと同時に、地域への外国の影響や外国とのつながりについて知ることを通して、自国認識の基礎を育てることが必要である。

③自国認識と国民的自覚の涵養については、増加する外国人の子どもたちの状況を踏まえれば、日本人であるという自覚を育てることを唯一とするべきではない。多様な子どもたちが在籍することを前提に、子どもたちの出身国やルーツを尊重することが大切である。したがって、今日の学校においては、ユネスコ国内委員会が明らかにした③自国認識と国民的自覚の涵養と、④他国・他民族・他文化の理解を分けて考えるのではなく、外国の人々の影響や文化によって、地域の様々な文化が変容しているという点にも配慮した学習内容を構成することが必要となってくるのである。

それでは、以上の内容を踏まえ、生活科では、国際理解教育として地域と関連づけどのような学習内容を構成していけばよいのかについて検討する。多田は、地域の特性を生かした国際理解教育の具体的内容として、以下の七つの学習内容をあげた（多田、2000年、pp.140-143）。

- ① 地域の自然・風土に着目した学習
- ② 地域の伝統に着目した学習
- ③ 地域の文化や人物に着目した学習
- ④ 地域の経済と産業に着目した学習
- ⑤ 地域の生活習慣に着目した学習
- ⑥ 地域の人々の気質に目を向けた学習
- ⑦ 身近な地域と世界との歴史的関わりに着目した学習

これらの7つの内容は、生活科においても取り入れることができる。①「地域の自然・風土に着目した学習」は、季節にわたるあそびのなかで学ぶことができる。ここで子どもたちは、地域の四季について気づきを深める。それに加えて、国際理解教育の視点として、外国の季節の話や、子どもたちの暮らしについて学習する。そのことは、低学年の子どもたちにとって、外国について知るためのきっかけとなる。②「地域の伝統に着目した学習」、③「地域の文化や人物に着目した学習」は、同じ単元で学習することができる。具体的には、伝統行事や祭りに参加する活動や、

それに尽力してきた人々との交流といった活動についての学習をあげることができる。地域独特の伝統や人々との交流に関する活動の中では、他の民族や他国の伝統行事や祭りを付け加えて紹介する。こうした学習によって外国についての気づきが深まるのである。④地域の経済と産業に着目した学習は、町探検で実践できる可能性がある。町探検では、地域の店や公共施設など様々なところを訪ねる。地域によっては、伝統産業に関わる工場もある。多田は、地域の伝統産業に目を向ける学習が、「世界の伝統産業を支える人々への共感を生み、近代産業の学習は世界と地域の結びつきを理解させていく」と述べている（多田、2000年、p.142）。多田の主張の通り、こうした学習は、地域の産業について関心を高めるだけではなく、地域の産業と外国との関係を子どもたちに伝えることによって、地域と世界のつながりについて知らせることができる。⑤「地域の生活習慣に関する学習」は、学校探検や家族に関する単元の中で取り入れることのできる学習内容である。生活科では、子どもたちが生活する学校や家族と、他国の生活を比較することによって学習する。⑥「地域の人々の気質に目を向けた学習」は、地域で暮らす様々な人々との交流を通して実践する。地域で暮らす外国の人々との交流は、国際理解や地域の多文化化の状況に気づくのに重要な意味がある。⑦「身近な地域と世界との歴史的関わりに着目した学習」に関しては、低学年を対象とした生活科の中で学習内容として位置づけることは難しい。一方で、今日、子どもたちが暮らす地域の伝統文化や産業がどのように外国と関わりがあるかといった点は、町探検や地域の伝統的な行事やあそびについて学ぶ活動のなで関連づけることができる。

以上のように、多田は、地域と関連した国際理解教育の内容について、七つの学習内容をあげた。以上の七つの学習内容に必要な点は、佐藤が指摘した文化多元主義を軸に学習内容を構成することの必要性である。例えば、②地域の伝統に着目した学習の場合にも、地域の伝統への外国からの影響関係と、それによって変容した伝統に焦点を当てて学習することが大切である。前章で論じた通り、森茂と鈴木の研究によると、生活科では、地域の文化と外国の文化を「比較する」、「結びつきを知る」ことによって国際理解を深める学習ができる。佐藤の論に従えば、地域と外国との「結びつきを知る」ことによって変容する地域の様子や文化を学習内容に取り入れていくことが必要である。その際に、多田があげた視点に基づいて、学習内容を構成することができるのである。

4. 国際理解教育の学習内容を取り入れた生活科の単元

前章では、多田の地域を対象とした国際理解教育の学習内容についての考え方を生活科の学習内容と関連づけて考察した。その結果は表1「地域を対象とした国際理解教育の学習内容」にまとめた。

表1の学習内容にしたがって、国際理解を目指す生活科の学習内容を構成することができる。次に、表2「生活科における国際理解教育の学習方法」は、先に検討した森茂と鈴木、田淵の先行研究に基づいて、生活科における国際理解教育の学習方法をまとめた結果である。

本章では、生活科の単元の中で、表1の内容と、表2に記した方法をどのように関わらせることができるのかについて考察する。そのために、本章では、東京書籍『新編 あたらしい せいかつ 上』（1年）と『新編 あたらしい せいかつ 下』（2年）に基づいて作成された年間指導計画の中の単元を取り上げる⁷⁾。そして、そこで取り上げられている単元が、表1の学習内容と表2の学習方法とどのように関連づけることができるのかについて考察する。1年の生活科は、「が

っこうだいすき」、「なつだあそぼう」、「いきものとなかよし」、「たのしいあきいっぱい」、「つくろうあそぼう」、「じぶんでできるよ」、「ふゆをたのしもう」、「もうすぐ2ねんせい」の8つの単元から構成されている。2年の生活科は、「春だ 今日から2年生」、「どきどきわくわくまちたんけん」、「生きものなかよし大作せん」、「うごくうごくわたしのおもちや」、「みんなでつかうまちのしせつ」、「もつとなかよしまちたんけん」、「つたわる広がるわたしの生活」、「あしたヘジャンプ」の8つの単元から成る。すべての単元は、表1と表2に示した学習内容と学習方法と関連づけることができる。どのように関連づけることができるのかをまとめたのが、表3「生活科の単元と地域を対象とした国際理解教育」である。

表1 地域を対象とした国際理解教育の学習内容

① 自然・風土
② 地域の伝承・文化・人物
③ 経済・産業
④ 生活習慣
⑤ 地域の人々の気質
⑥ 地域と世界の歴史的関わり

*多田 (2000) pp.149-143に基づいてまとめた。

表2 生活科における国際理解教育の学習方法

(1) 比較する
(2) 結びつきを知る
(3) 交流する

*森茂と鈴木 (1993) p.42、田淵 (2000) p.35をもとに作成した。

表3からわかる通り、表1に示したそれぞれの学習内容は、生活科の単元に取り入れることができる。まず、1年の単元について考察したい。1年では、①「自然・風土」に関する学習内容が5つの単元に位置づけられる。いずれも、学習方法は、(1)「比較する」である。例えば、「なつだあそぼう」であれば、子どもたちが暮らす地域と外国の夏の暮らしについて比較する。「いきものとなかよし」では、公園などに虫を探しに行く。それに加えて、外国の虫や生きものなどを子どもたちに紹介することによって、外国への興味・関心が高まる。「がっこうだいすき」、「じぶんでできるよ」は、④「生活習慣」の学習内容を取り入れる。ここでは、外国の子どもたちの学校生活や、日常生活と(1)「比較する」ことを通して実践する。「つくろうあそぼう」は、⑤「地域の人々の気質」を学習内容に取り入れることができる。具体的には、子どもたちが作成したおもちゃで地域の人々と一緒に遊ぶこと、そして地域で暮らす外国人の人々からその国のおもちやを教わり交流をすることである。外国の人と一緒に遊ぶことは、子どもたちにとって異文化に触れる重要な機会である。学習方法は、(3)「交流する」である。このように、地域の外国人や彼らの文化を学ぶことは、地域の文化や人々の多様性に気づくことができるという点においても意味がある。

次に、2年についてである。2年の中心的な単元は、町探検である。「どきどきわくわくまちたんけん」、「もつとなかよしまちたんけん」、「つたわる広がるわたしの生活」の三つの単元は、町探検に関わる。町探検に関わる三つの単元は、①「自然・風土」、②「地域の伝承・文化・人物」、③「経済・産業」、⑤「地域の人々の気質」、⑥「地域と世界の歴史的関わり」の五つの学習内容を取り入れることができる。①「自然・風土」に関しては、地域と外国の自然・風土とを(1)「比較する」する。②「地域の伝承・文化・人物」では、地域で暮らす日本人と外国人の双方と(3)「交流する」ことを通して、人々が伝承する文化について学ぶ。③「経済・産業」について、子どもたちは、地域の店や工場といったところを訪ねることによって、地域の経済・産業の特徴を知る。⑤「地域の人々の気質」は、日本人だけではなく、地域で暮らす外国人と(3)「交流する」ことを通して、人々の気質について気づくことが可能であろう。⑥「地域と世界の歴史的関わり」については、世界と地域が、昔からどの様なつながりがあったのか(2)「結びつきを知る」ことで

表3 生活科の単元と地域を対象とした国際理解教育

	単元名	学習内容	学習方法
一年	がっこう だいすき	④生活習慣	(1)比較する
	なつだ あそぼう	①自然・風土 ⑤地域の人々の気質	(1)比較する (3)交流する
	いきものと なかよし	①自然・風土	(1)比較する
	たのしいあき いっぱい	①自然・風土	(1)比較する
	つくろう あそぼう	⑤地域の人々の気質	(3)交流する
	じぶんで できるよ	④生活習慣	(1)比較する
	ふゆを たのしもう	①自然・風土 ⑤地域の人々の気質	(1)比較する (3)交流する
	もうすぐ 2ねんせい	②地域の伝承・文化・人物	(1)比較する
二年	春だ 今日から2年生	①自然・風土	(1)比較する
	どきどきわくわくまちたんけん	①自然・風土 ②地域の伝承・文化・人物 ③経済・産業 ⑤地域の人々の気質 ⑥地域と世界の歴史的関わり	(1)比較する (2)結びつきを知る (3)交流する
	生きもの なかよし 大作せん	①自然・風土	(1)比較する
	うごく うごく わたしのおもちゃ	⑤地域の人々の気質	(3)交流する
	みんなでつかう まちのしせつ	④生活習慣	(1)比較する
	もっと なかよし まちたんけん	①自然・風土 ②地域の伝承・文化・人物 ③経済・産業 ⑤地域の人々の気質	(1)比較する (2)結びつきを知る (3)交流する
	つたわる 広がる わたしの 生活	①自然・風土 ②地域の伝承・文化・人物 ③経済・産業 ⑤地域の人々の気質 ⑥地域と世界の歴史的関わり	(1)比較する (2)結びつきを知る (3)交流する
	あしたへ ジャンプ	②地域の伝承・文化・人物	(1)比較する

実践することができる。

2年は、町探検に関する単元の他に、「春だ 今日から2年生」、「生きものなかよし大作せん」がある。この二つの単元は、1年の「なつだあそぼう」や「いきものとなかよし」と同じく、①「自然・風土」を学習内容として位置づけ、外国と(1)「比較する」ことを通して実践する。「みんなでつかうまちのしせつ」は、図書館をはじめとする様々な地域の施設に行くという活動が中心である。ここでは、外国には、どのような施設があるのか、日本と同じところや違うところを(1)「比較する」ことを通して学習する。

東京書籍『新編 あたらしい せいかつ 上』(1年)と『新編 あたらしい せいかつ 下』(2年)に基づくと生活科には1、2年合わせて16の単元がある。そのすべての単元で国際理解教育の学習内容と関わらせることができるとことが明らかとなった。その中で、九つの単元が地域の①「自

然・風土」と外国を(1)「比較する」ことで国際理解教育の視点を取り入れることが可能である。注目すべきであるのが、1年「つくってあそぼう」と2年「うごくうごくわたしのおもちゃ」である。この二つの単元では、日本人と外国人の双方からおもちゃの作り方を教わって、一緒に遊ぶことを通して、日本と外国を(1)「比較する」だけではなく、異なる文化をもった人々と(3)「交流する」のである。2年の町探検に関する単元は、学習内容として①「自然・風土」だけではなく、②「地域の伝承・文化・人物」、③「経済・産業」、⑤「地域の人々の気質」といった複数の学習内容を盛り込む。そして、学習方法においても、(1)「比較する」、(2)「結びつきを知る」、(3)「交流する」といった多様な学習方法を用いて、国際理解教育としての学習内容への気づきを深める実践に取り組むことができるのである。

5. 国際理解教育としての生活科の実践事例の検討

前章では、東京書籍『新編 あたらしい せいかつ 上』(1年)と『新編 あたらしい せいかつ 下』(2年)に挙げられたすべての単元で、地域を対象とした国際理解教育が実践できる可能性があることについて論じた。本章では、実際に地域を対象とした国際理解教育が生活科の中で具体的にどのように実践することができるのかについて検討する。本章で取り上げる実践事例は、外国に関する文化を取り入れて作成された川崎市立さくら小学校(以下、さくら小学校と称す)と大阪市立御幸森小学校(以下、御幸森小学校と称す)の生活科の指導案を考察の対象とする⁹⁾。

まず、さくら小学校の実践について検討する。さくら小学校の校区には、韓国朝鮮にルーツのある子どもたちが通う朝鮮初級学校がある。1年、2年それぞれの単元で、朝鮮初級学校の子どもたちと交流をすることを通して国際理解を深めていることが、さくら小学校の実践の特徴である。具体的に、1年では、生活科の単元「ふゆとともだちになろう(昔遊び体験)」の中で、国際理解教育の学習内容を取り入れた。単元「ふゆとともだちになろう(昔遊び体験)」の目標は、「昔から伝わる遊びをみんなで楽しむことができるようにする」である。昔あそびは、こま、羽根つき、けん玉、ぼうずめくり、だるま落とし、ふくわらいといった日本のあそびが中心である。それに加えて、ペンイという韓国朝鮮のこまも取り入れている。日本の昔あそびに関しては、さくら小学校の子どもたちがあそび方を朝鮮初級学校の子どもたちに説明して一緒に遊ぶ。この単元は、昔あそびを通して、地域で暮らす外国にルーツのある人々の気質を知り、交流する。したがって、学習内容は、⑤「地域の人々の気質」にあてはまる。そして、学習方法は、(3)「交流する」である。

さくら小学校では、2年でも朝鮮初級学校の子どもたちと交流する生活科の実践を行っている。単元名は、「作って、あそんで、おもちゃランド」である。単元目標は、「自分たちが作ったおもちゃあそびや、朝鮮初級学校の子どもたちからチマチョゴリの折り紙を教わる活動を通して、朝鮮初級学校の友達との交流を深める」である。この実践では、さくら小学校の子どもたちが作ったジャンプロケット、どんぐり流れ星、風船バレー、ブンブンごま、ぐるぐる風車などのおもちゃで、朝鮮初級学校の子どもたちと遊ぶ。そしてさくら小学校の子どもたちは、朝鮮初級学校の子どもたちからチマチョゴリの折り紙を教わることを通して交流を深める。この実践も、1年の「ふゆとともだちになろう(昔遊び体験)」と同じく、⑤「地域の人々の気質」にあてはまる。そして、学習方法は、(3)「交流する」である。さくら小学校の生活科における実践の特徴は、昔あそびや、子どもたちが作ったおもちゃを用いて、朝鮮初級学校の子どもたちと交流することを通して、地域で暮らす外国にルーツのある人々に対する気づきを深めることであった。本実践を通して、子ども

たちは、地域の外国にルーツのある人々との交流を深め、地域の外国の文化を持つ人々や彼らの文化について知ることができる。

次に、御幸森小学校である。御幸森小学校の校区にはコリアンタウンがある。こうした地域の特徴から、御幸森小学校の生活科には韓国朝鮮を対象とした実践がある。御幸森小学校では、1年「むかしからのあそびにちょうせんしよう」、「たくさん出会おう韓国朝鮮」、2年「みんなおおきくなったね」、「こんなに大きくなったよ」、「もっと知りたいな町のこと」で国際理解教育の視点が取り入れられていた。

1年「むかしからのあそびにちょうせんしよう」の目標は、「身近な地域の方に昔からの遊びを教わって楽しく遊んだり、交流したりすることができる」、「韓国朝鮮にも、日本と同じような遊びがあることを知り、楽しく遊ぶことができる」である。単元では、まず地域の人々からこまやけん玉といった日本で伝承されているあそびを学ぶ。その後で、韓国朝鮮のペンイ、トゥホ、チェギといった昔あそびであそぶ。そして、日本と韓国朝鮮のあそびを比較し、双方のあそびの共通点に気づく。この単元は、地域の人々から日本のあそびを学び、その後、韓国朝鮮の昔あそびで遊ぶ。したがって、学習内容は、②「地域の伝承・文化・人物」である。学習方法は、(1)「比較する」である。ここでは、韓国朝鮮と日本のあそびの共通点や相違点についての気づきを深めている。

次に、「たくさん出会おう韓国朝鮮」である。この単元の目標は、「自分や友達の本名（民族名）を知り名前大切に気付く」、「韓国朝鮮の民話や音楽・遊びに親しむ」である。この目標からもわかる通り、この単元は、クラスの中に韓国朝鮮にルーツのある子どもたちが在籍していることから、彼ら自身の文化について学習する。まずは、「アンニョンハセヨ、アンニョンヒケセヨ」などの韓国朝鮮語の挨拶を学ぶ。そして、「カナタラ」や「アプロ」といった韓国朝鮮語の歌をうたい、その後で、ペンイ、カウィ・バウィ・ボ（じゃんけん）などのあそびをする。この単元は、前述した通り、韓国朝鮮にルーツのある子どもが在籍していることから、彼らの文化を中心に授業が構成されている。この単元は、地域で暮らす韓国朝鮮にルーツのある人々の文化を取り入れていることから、学習内容は②「地域の伝承・文化・人物」である。こうした活動を通して、韓国朝鮮にルーツのある子どもたち自身が韓国朝鮮とのつながりを知る。そして、日本人の子どもたちも、韓国朝鮮のあそびを通して、日本と韓国朝鮮の関係の近さについて気づくことができる。こうした点から考えると、この学習方法は、(2)「結びつきを知る」である。

2年「みんなおおきくなったね」、「こんなに大きくなったよ」の単元名は若干異なるが同じ内容である。この単元の目標は、「多くの人々の支えにより自分が成長したり、できることが増えたりしたことに気づき、自分の成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを表す」と「韓国朝鮮にも、子どもの成長を願う行事があることを知る」である。この単元では、地域の神社で祝われている七五三に焦点を当てる。さらに、韓国朝鮮にも子どもの成長を願うトルチャンチという満1歳を祝う行事があることを知らせる。そして、それらの行事が何故あるのかについて話し合う。この単元の学習内容は、地域で伝承されている子どもを祝う行事に焦点を当てていることから④「生活習慣」である。学習方法は、韓国朝鮮の子ども成長に関する行事との違いや共通点について考えることから(1)「比較する」である。子どもたちは、それぞれの国の伝統や文化の共通点を知ることによってより双方の国を身近に感じることができる一方で、お祝いの衣装や行事の違いを通して、それぞれの伝統特有の面白さを発見する。

御幸森小学校2年では、「もっと知りたいな町のこと」の中で国際理解教育の視点を取り入れている。単元の目標は、「自分たちの住んでいる町には、韓国朝鮮に縁のあるものやお店がたくさん

あることを知る」、「互いのことを理解し合ったり、心を通わせたりして関わることの楽しさがわかり、身の回りの多様な人々と交流することができるように、自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う学習を行うことができる」である。この単元を通して、子どもたちは、韓国朝鮮の食材を扱う店や飲食店など、地域に韓国朝鮮に関わる様々な店があることに気づく。そして、町探検の活動を通して、地域の店で働く人々と交流する。こうした活動は、地域の人々についての気づきを深めるとことから⑤「地域の人々の気質」に関する学習内容であることがわかる。そして、学習方法は、地域が韓国朝鮮にルーツのある人々や、それらの人びとの食文化との関わりを通して、多文化的な状況を知らせていることから、(3)「交流する」である。そしてこの学習では、地域にある店が韓国朝鮮と関わりがあることについて学習していることから、③「経済・産業」に関わる学習内容も含まれている。学習方法は、韓国朝鮮との(3)「結びつきを知る」である。

以上の通り、国際理解教育の視点を取り入れた生活科の実践事例を考察した。いずれの実践も、地域で暮らす外国にルーツのある人々や彼らの文化、そして経済・産業に焦点を当てて実践されていた。そこでの学習内容は、地域で伝承されている日本の文化と外国の文化について、そして地域で暮らす外国にルーツにある人々と交流を深めることを通して彼らの気質についての気づきを深めることであった。学習方法は、(1)「比較する」、(2)「結びつきを知る」、(3)「交流する」のそれぞれの方法を用いて実践されていた。

6. おわりに

本論は、地域と関連づけた生活科の学習において国際理解教育をどのように展開することができるのかについて検討してきた。まず、本論では、先行研究に基づいて、生活科における国際理解教育の学習内容と学習方法を明らかにした。学習内容は、多田の考え方に従って、①「自然・風土」、②「地域の伝承・文化・人物」、③「経済・産業」、④「生活習慣」、⑤「地域の人々の気質」、⑥「地域と世界の歴史的関わり」の五つを設定した。ここで示した五つの学習内容は、(1)「比較する」、(2)「結びつきを知る」、(3)「交流する」という三つの学習方法を用いて、生活科の中で国際理解教育を展開することができる。

こうした視点がどのように取り入れることができるのかについて、東京書籍『新編 あたらしい せいかつ 上』(1年)と『新編 あたらしい せいかつ 下』(2年)にあげられた16の単元を検討した。その結果、すべての単元の中で、前述した国際理解教育の学習内容と関連づけて実践できる可能性があることが明らかとなった。地域に関連づけた生活科の国際理解教育の中で、注目すべきであるのは、外国にルーツのある人々と交流し、彼らの文化について学ぶ実践である。本論で取り上げたさくら小学校と御幸森小学校の実践では、生活科の学習の中に国際理解教育の視点を取り入れていた。例えば、地域で伝承される日本と外国の文化を比較することや、地域の外国にルーツのある人々と交流することといった活動である。こうした活動は、国際理解教育として外国に対する理解を深めることができるだけでなく、子どもたちが暮らす地域の文化の多様性についての気づきを深めることができる点において意味がある。

註

- 1) 法務省 http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00050.html 2016年9月29日閲覧。

- 2) ユネスコ <http://www.unesco.or.jp/unesco/> 2016年7月3日閲覧。
 - 3) 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(中央教育審議会 第一次答申)、中央教育審議会、平成8年7月19日。
 - 4) 同上。
 - 5) 『小学校学習指導要領解説 生活編』平成20年6月、文部科学省、p.3。
 - 6) 同上、p.15。
 - 7) 東書Eネット東京書籍 <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/keikaku/seikatsu.htm> 2016年8月18日閲覧。
 - 8) 1年「がっこうだいすき」は15時間構成であり、その中には「すたあとぶつく」が含まれている。生活科では3時間で実施し、他教科で9時間実施するように記述されている。
 - 9) さくら小学校の実践は、次の指導案を分析対象とした。「1年生活科学習指導案 日時平成28年1月26日(火) 3、4校時、単元名「ふゆともだちになろうー昔遊び体験」、2年生生活科指導案 日時平成28年1月26日(火) 5校時(13:15~)、単元名「作って、あそんで、おもちゃランド」。
- 御幸森小学校の指導案は以下の文献の中に掲載されていたものである。『ユネスコスクール認定記念 研究主題「児童一人一人の自尊感情を高め自己(民族的)アイデンティティを確立し生きる力をはぐくむ」ーこの町が好き! 出会い・つながり・ひろげる教育』平成24(2012)年11月、大阪市立御幸森小学校。『平成25(2013)年度 研究集録 児童の自主性と協調性を養い心豊かにしなやかに生きる力を育むー言語活動を通して』、大阪市立御幸森小学校。

引用参考文献

- 加藤幸次、浅沼茂(2000)『国際理解教育をめざした総合学習』黎明書房。
- 佐藤群衛(2001)『国際理解教育ー多文化共生社会の学校づくり』明石書店。
- 嶋野道弘(1994)「生活科のめざすところー自立への基礎を養う」『青少年問題』41(6)、一般財団法人青少年問題研究会、pp.11-17。
- 渋谷忠雄(1992)「生活科は地域のなかからつくるものー生活科と生活原型の追求」『「教育」別冊6生活科を創りかえる』、教育科学研究会編著、国土社、p.6。
- 多田孝志(2000)『学校における国際理解教育ーグローバルマインドを育てる』、東洋館出版社。
- 田淵美和子(2000)「生活科における国際理解教育ー身近な人々とのふれあいを通して」『せいかつか』7、日本生活科教育学会、pp.22-27。
- 森茂岳雄、鈴木克彦(1993)「小学校生活科・社会科における国際理解教育カリキュラムの実践構想」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』25号、p.42。
- 日本ユネスコ国内委員会(1982)『国際理解教育の手引き』東京法令出版。

(2016年9月30日提出)

(2016年12月15日受理)